

採種ほ産

消毒種子の取扱い

対象病害虫

- ばか苗病 ●ごま葉枯病
- いもち病 ●もみ枯細菌病
- 褐条病 ●苗立枯細菌病
- イネシンガレセンチュウ

採種ほ産種子の「消毒」から「播種」までの手順

日程	1	2	3日	4	～	12日			
作業の内容と方法	種子消毒のための浸種 催芽のための浸種			催芽のための浸種 (吸水)		催芽	播種		
	種子1kgに水約4ℓ 3日間は水の交換を しません(薬効)			水の交換を適時 静かに行います		28～30℃ で15～20 時間加温し ハト胸状態 にします	乾籾160g (催芽200g) /箱 前後で播種 厚播きを 避けます		
	← 積算温度 100～120℃ → (水温10℃で10日～12日間浸種します)								

- ◎消毒種子とは、薬剤が吹付け処理された種子で、浸種後に消毒効果が現れます。
- ◎モミガードC・DFとスミチオン乳剤の混合吹付け処理がされています。
- ◎着色ムラが見られることがありますが、薬剤の効果に影響はありません。
- ◎必ずハト胸状態を確認して播種して下さい。

1

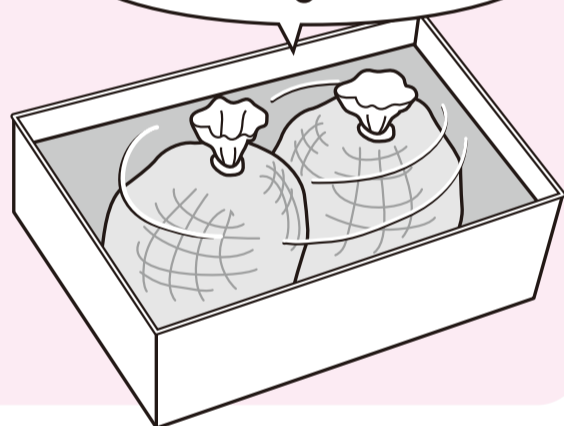
浸種催芽作業

- 1.消毒吹付籾を3日浸種する間に、薬剤が水に溶け出し、消毒効果が発揮されます。**最初の3日間は、決して水の攪拌や水交換をしないこと。**
- 2.水の交換は、4日後に第1回目を静かに行います。その後は、**発酵臭や異臭がする時は水換え**をこまめに行います。
- 3.発芽の均一をはかるため水温は**10～15℃**で、積算温度100～120℃(水温10℃で10～12日間)を目安に行います。水温9℃以下の日は積算しないでください。
- 4.催芽の完了は、**ハト胸状態(芽の長さは1mm程度)**になった籾の割合を見て判断します。育苗器による出芽では5割、平置き出芽では8割以上とします。
- 5.ハト胸状態になっていない種子を播種すると出芽が不揃いになります。
- 6.ハトムネ催芽器利用時に、浮遊物が発生することがありますが、薬剤の効果や薬害の影響はありません。
- 7.残った種子は、決して食用にしたり、家畜のエサに混ぜないで下さい。



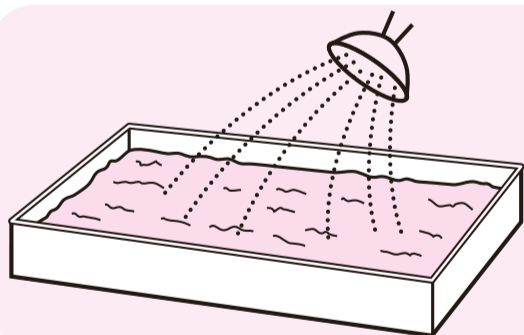
ハト胸状態

種子1kgに水4ℓ



2

播種時の灌水

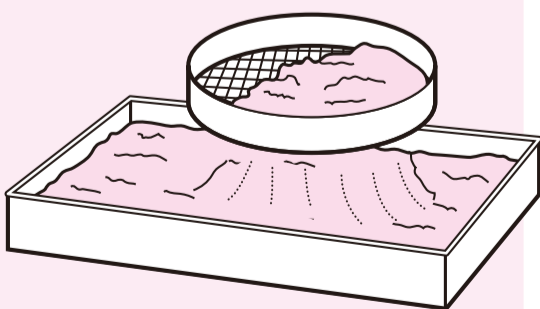


床土には、底から水がにじむ程度に灌水します。

3

覆土を十分に

すべての種子が覆土によって見えなくなるまでかけてください。覆土が薄いと根上りの原因となります。



4

出芽は適正な温度で

- 1.出芽は28～30℃で行います。31℃以上の高温は、**特にもみ枯細菌病等病害発生の原因になるので、避けてください。**
- 2.ビニールハウスは気温が上昇しやすいので、換気には十分注意してください。
- 3.無加温平置出芽法では、根上りが発生することがあります。
- 4.田植えの時の苗の状態は、本葉2～2.5枚、草丈12～13cm、葉身長7～8cmが理想です。

コシヒカリ 5月5日以降の田植えで **高品質米生産を!**

茨城県・(公社)茨城県農林振興公社・JAグループ茨城
茨城県食糧販売協同組合・茨城県食糧集荷協同組合